

アルバート・O・ハーシュマン著
『經濟發展の戰略』

Albert O. Hirschman, *The Strategy of Economic Development*, Yale University Press, 1958, Pp. xiii+217.

小島 清

一 はしがき

「直接の體驗を解き明かすことこそ思想の唯一の正當づけである。そして思想はかかる體驗の構成内容を分析的に觀察することから始まるのだ。」これが本書の序文の冒頭をかざる引用句である。著者ハーシュマンはそれを實踐し、ラテン・アメリカ(とくにコロンビア)の經濟發展に關する豊富な體驗を直接の基礎にし、それを分析し反獨し一般化し、後進國經濟發展計畫の基本的戰略的問題について、ここに創意にあふれた理論構想を提供している。かかる接近態度は、わが恩師赤松要博士が、日本の經濟發展についての實證分析を通じてついに「産業發展の雁行形態」というユニークな理論に到達されたことと軌を一にする。そのうえ興味をそそのくのは、赤松理論とハーシュマン理論とにおいて、その問題意識とか着眼點において、また獨創

的な理論構想において、多くの類同性を見出すことである。わたくしが、ハーシュマンの新著を取上げるねらいも一に、われわれの雁行形態論との類似點を發見し、彼がわれわれの理論よりも一歩前進し付加しているであろうより新しい獨創點を探索したいということにある。

赤松理論とのブライオリティを別問題とすれば、本書はまことに創意と新鮮味にあふれた後進國經濟發展の理論書だと高く評價したい。獨創的であるが故に決して読み易い著作とはいえない。獨創的理論は新しい術語を必要とする。本書にあらわれる多數の新術語だけでも、理解に容易だとはいえない——それは赤松理論についても等しくあてはまることだが。しかしそれ故にこそ本書が盡きない魅力をもっているともいえる。ちなみにハーシュマンの獨創性はその舊著 *National Power and the Structure of Foreign Trade*, Univ. of California Press, 1945. における世界貿易構造の分析について十二分に發揮され、學界の汎く賞嘆を惜しまないところである。

ハーシュマンの問題の中心は二つあると思われる。第一はいわゆる均衡的成長 *balanced growth* の理論を批判し、それに代る独自の構想——不均衡的成長の理論と呼んでおこう——を展開することであり(第一章—第四章)、第二は後進國の工業化着手の順序とかプロセスについての戰略理論である(第五章—第八章)。この二問題の核心を抜き出すことに、わたくしの書評をしぼりたい。その他若干の散發的重要問題(第九章、攪亂——インフレーション、國際收支壓力、人口壓力——)の役割、

第十章、經濟成長の地域的・國際的波及、第十一章、政府と外國援助の役割)が含まれているのであるが、紙幅の制約上、觸れえない。

(1) 赤松要「吾國經濟發展の綜合辯證法」商業經濟論叢、第一五卷上冊、一九三七・七。同「わが國產業發展の雁行形態」一橋論叢、一九五六・一一。なお小島清『日本貿易と經濟發展』一九五八、第七章、參照。

二 不均衡的成長の理論

近年後進國經濟發展に關する著作、論文はまことに應接に暇のない程、加速度的に増加しているが、それにもかかわらず魅力的・獨創的理論はこれまたまことに寥々たるものである。おそらく唯一の魅力ある理論はヌルクセ⁽¹⁾であろうが、それは(a)後進國が貧困の惡循環から離脱する第一着手としての擬裝失業の活用、その資本形成への轉化と、(b)均衡的成長ないし同時多面的投資 simultaneous multiple investments の理論、すなわち投資と發展は一群の補完的な産業に同時的に行われ、相互に市場を提供し、相互に支持し合うようになさねばならないという考え方とである。

ハーシュマンはヌルクセによるこれまでの最大の成果を批判し、それを乗越えて自己の新理論を展開しようとし、不均衡的成長の理論を提示している。ヌルクセの第一點に代るものとして、「發展決意」development decisions なし「投資實行力」ability to invest の缺除を指摘する。つまり後進諸國がその

發展潜在力を活かしえないのは發展のために必要な諸決意を必要な數だけまた要請されるスピードで果しえないことに基づく(二五頁)。いかえれば、現存する貯蓄あるいは潜在的には現存している貯蓄を生産的な投資機會にうまく流し込むことの困難さ、例えば發展決意を立て實行する能力が缺けていること、つまり投資實行力の缺除に基づく(三六頁)。そしてそれが後進性のゆえに不足している多くの要因をつきつめてみると一つに歸する基本的な不足物なのである(二五頁)。

後進國にも、退藏された金、外貨とか、富者の贅澤な消費とか、冠婚葬祭などの浪費や贈物とか、さらには大きな餘暇とかいう形で、動員可能な貯蓄はかなり存在している(三七頁)から、それを動員する投資實行力が生み出されさえすればよいのだと、ハーシュマンは主張する。擬裝失業の動員というヌルクセの着想と、現存ないし潜在貯蓄の動員というハーシュマンの着想とは本質的に異なるものではないと見てよいであろう。擬裝失業の動員ということがヌルクセの言うようにたやすいことであるならば、どの後進國もすでに實行した筈である。だからその根本に横たわる困難つまり投資實行力の缺除をハーシュマンが強く指摘したことは正しいであろう。そこで問題はいかにして發展決意とか投資實行力を創り出すかである。それをいざなう妥當かつ有効なメカニズムを追求せねばならない。そこにこそ均衡的對不均衡的成長の對立という第二の問題が見出されるのである。

そこでハーシュマンは均衡的成長の理論を二點から批判す

る。第一は、多面的投資を同時的に行つてつりあひのとれた需要を喚起することが果して必要であらうかという點である。それは成熟した先進國經濟の過小雇用狀態に對する療法ではあるが、後進の未開發經濟には適用不可能であり、同時的投資などということとは、低い資本蓄積力とか諸要素の後進性などから見ても、到底手に届かないことである(五四頁)とハーシュマンは批判する。

第二に、多くの投資が同時に行われ諸産業諸施設が同時に整うことによつて外部經濟が始めて創り出され、それをお互に内部化し(internalization of external economies)企業のコストを低めることができるという考え方が、均衡的成長の系論として存在する。これに對してはハーシュマンは、急激な資本主義化に伴う大きな社會的犠牲つまり外部不經濟が隨伴することを忘れてはならぬ(五六—七頁)、従つて外部經濟と不經濟の内部化が投資實行を誘引する収益性の全般的上昇をもたらすとは斷言できない(六一頁)。多面的投資を同時に實行すべしというものはむしろ後進國の發展決意をためらわせ遅れさせ阻害することになるという。

それでは均衡的成長理論にとつて代るハーシュマン理論の核心は何であるか。それは第一に「pace-setter」とか new development blocks とか leading sector とか引かれる發展據點を創ることである。第二に發展據點ができればそれが投資の補完的效果 complementary effect により次々に誘發投資 induced investment (ハーシュマンによる獨特の定義がある

——後述)を導く。第三に、その次の發展據點が創り出される。このように段階的・繼起的發展を考へてゐるようであり、それは同時的・多面的發展とは鋭く對立してゐる。ハーシュマンの着想は、均衡的成長ではなくして「シーソー的前進」(六三頁)とか、「不均衡の連鎖としての發展」(六五頁)とか「均衡からの脱皮の繰り返しこそが正にわれわれの觀點からする發展の理想型である」(六六—七頁)とかいう表現にいはんやよく代表されてゐる。核心をいく章句を一つだけ引用しておこう。

In this form, the balanced growth theory is essentially an exercise in retrospective comparative statics. If we look at an economy that has experienced growth at two different points in time, we will of course find that a great many parts of it have pushed ahead: industry and agriculture, capital goods and consumer goods industries, cars on the road and highway mileage—each at its own average annual rate of increase. But surely the individual components of the economy will not actually have grown at these rates throughout the period under review. Just as on the demand side the market can absorb “unbalanced” advances in output because of cost-reducing innovations, new products, and import substitution, so we can have isolated forward thrusts on the supply side as inputs are redistributed among users through price changes, and at the cost of some temporary short-

ages and disequilibria in the balance of payments or elsewhere. In fact development has of course proceeded in this way, with growth being communicated from the leading sectors of the economy to the followers, from one industry to another, from one firm to another. In other words, the balanced growth that is revealed by the two still photographs taken at two different points in time is the end result of a series of uneven advances of one sector followed by the catching-up of other sectors. If the catching-up overreaches its goal, as it often does, then the stage is set for further advances elsewhere. The advantage of this kind of seesaw advance over "balanced growth," where every activity expands perfectly in step with every other, is that it leaves considerable scope to *induced* investment decisions and therefore economizes our principal scarce resource, namely, genuine decision-making. (pp. 62—63)

右の如きハーシーマンのシーソー的繼起的發展は正に辯證法的プロセスであり、赤松博士の雁行形態論と構想を「一に「つ」ること、更めて指摘するまでもない。だがもう一つ注目すべきは赤松博士がつとに一九四八年に發表された供給乗数ないし輸入乗数と類同の着想にハーシーマンが到達してゐることである。先ず彼のいう「投資の補完的效果」というのは、發展據點の投資に成功すれば、それが追加的補完的投資を誘引する「つ

ま」の「投資が投資を呼ぶ」contagious effect on more investment と「つ」現象であり(四一頁)それはA商品の生産増加がB商品の限界費用を低める(AがBの原料、機械等であるとき)と「つ」ように規模の經濟を伴う、またそれ故にB産業への投資が誘引される(六七—九頁)。それが彼のいう「誘發投資」つまり先行の投資によって生み出された外部經濟の利益によつて誘引される續行投資である。そして次のような「乗数」概念に到達してゐる。

This definition makes induced investment look very much like the multiplier: each investment is conceived as inducing a series of subsequent investments and there is an element of convergence as the "output" of external economies diminishes at each step. This, however, does not necessarily mean that the investments themselves converge; there is no rigid connection between the size of an investment and its net "input" of external economies, although some association between these two magnitudes may be expected to exist. (p. 71)

(1) Ragnar Nurkse, *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries*, Oxford, 1953. 土屋六郎譯 『後進諸國の資本形成』一九五五。

(2) 均衡的成長理論に對する批判として次を參照。John Sheahan, "International Specialization and the Concept of Balanced Growth," *Quarterly Journal of Eco-*

nomies, May 1958. 麻田四郎「後進國開發理論における Balanced Growth 概念について」商學討究、一九五八・一二。

(3) 赤松要「供給乗數理論の提案——ケインズ乗數理論の批判——」經濟、一九四八・二。これは鹽野谷、千種兩教授のコメントとともに、赤松要『世界經濟の構造と原理』一九五〇、第八章に收録されている。また英譯がある。

“The Theory of ‘Supply-Multiplier’ in Reference to the Post-war Economic Situation in Japan,” *Annals of the Hitotsubashi Academy*, Oct. 1950.

三 後進國工業化のプロセス

不均衡的成長の中心問題であり特色となるものは、どこに發展據點を決めるか、そしてどのような順序で繼起的に(同時的ではなく)投資を行うべきかという、最有效繼起 the most efficient sequence を見出すことにある。それが發展問題の中心をなす投資選擇ないし投資基準の問題であることはいうまでもない。發展據點すなわち投資のプライオリティは最大の誘發投資の連鎖を導くものたるべきことは、すでに明らかであろう。投資Aを優先させ投資Bをしばらく延期することであり、BからAへと逆轉してはならない。これが繼起のない連鎖的解決法 sequential or chain solution の核心である(七八頁)。いま投資Aは發展據點であり最優先されるが、それに續いて投資Bを行うには一〇、Bに續行してCを行うには一〇、Cに續

行してDを行うには一〇のそれぞれコスト(資源或は時間)を要するでしょう。つまり、A、B、C、D四産業をもつに右の直線的進行では、投資Aのほかに三〇のコストがかかる。だがAからBを飛ばしてCを行えば一二のコストであり、Cが完成してからBを行うには、外部經濟利益により、五のコストで足りる。従ってC→Dのコスト一〇を加えると、合計で二七のコストですむということが考えうる。後者のほうがより有效な繼起であることはどうまでもない(八〇—八二頁)。この論理からシーソー的發展が導かれるのである。

ハーンマンは、右の有効繼起の論理を先ず、SOC (social overhead capital) とDPA (directly productive activities) の關係に適用する。兩者は均衡的成長理論の言うように常に平行して増大するものではなく、時にSOCが先行して伸び、DPAが後續しやがて追いこし、ために再びSOCが伸ばされるといふ如き、階段的繼起 stair-case sequence (八九頁)をたどるものだとする。これが development via excess capacity of SOC であるが、これと逆にDPAが先行する development via shortage of SOC の二つのタイプが考えられる。

次に、同じ論理を直接に生産的な活動(DPA)の繼起に適用する。これが農業對工業、輸出促進對輸入代替、重工業對輕工業などの選擇に答える途である。それはより大きな誘發投資、いっそうの發展へのより大きな拍車力をもつもの (more effective spur to further development) を先行せよとす

うことに盡きるが、これを連環効果 linkage effect と呼んでいる。さきの SOG と DPA の関係の二タイプと同様に、これも二つのタイプが考えられる。

(a) 後向き (backward) 連環効果。最終消費財産業が先に興されると、その原料、さらに機械など「投入物」の生産が次に誘引されてくる効果。(b) 前向き (forward) 連環効果。例えば鐵鋼生産が先に興され、それを投入物として利用する産業が次々に誘引される如き効果(一〇〇頁)。後者の場合には、master industry と satellite industry の関係が生ずる(一〇二頁)。そこでは先の「供給乗数」効果が働き、産業成長の加速度が生ずる。

こういふ(a)と(b)の連環効果が投入産出分析による實證で例示されていることは興味がある(一〇六―七頁の表)。それはイタリ、日本、米國の平均値であるが、例えば鐵鋼はaが六六、bが七八で共に高い効果をもつが、商業(一六と一七)、サーヴィス、交通、漁業のごとき final primary production は兩者ともに低い。またaは大きいbは小さいタイプ (final manufactures) と、その逆にaは小さくbが大きいタイプ (intermediate primary production) がある。こういふ連環効果の大小が後進國開發投資の一つの重要な基準を、また新しい興味ある視點を提供していることは、いふまでもない。

ところが連環効果が大きいという基準だけから、例えば後進國でも重工業を優先すべきだという結論には來ない。そこに問題がある。もつとほかの基準も同時に考慮にいれられねばなら

ない。就中、比較生産性と資本集約度格差の問題が、連環効果基準の採用をさまたげる制約條件となろう。三つの基準をいかに綜合して判断すべきかという點がハーシュマンにおいて必ずしも明瞭でないように思われる。

ハーシュマンは後進國は、重工業からではなく、むしろ最終段階産業 last industries, final touches から着手すべきことをすすめている。それはたしかに最終消費財に轉化する一段階しかもたず、それ以前の後向き連環効果は、輸入に待つため、當分の間持ちえない。この意味において「飛び地的輸入活動」 enclave import activities といえる。だが最終段階産業が發展點になることによつて、後向き連環効果が、次第に輸入が自己生産にとつて代られることによつて、後進國自體の手中に收められ、發展を擴張させることになる。ここに輸入↓自己生産↓輸出というわれわれの「雁行形態の基本型」ならびにそういうプロセスを繰返しつつ消費財産業から生産財産業へと高度化する「雁行形態の變型」と同一の構想に達する。その重要な一句を引用しておこう。

In fact, much of the recent economic history of some rapidly developing countries can be written in terms of industrialization working its way backward from the "final touches" stage to domestic production of intermediate, and finally to that of basic, industrial materials. In this way, industrialization has even proven to be a powerful stimulus to the development of agriculture. (p.

112)

そして「後向き連環効果による資本形成」の興味ある投入産出モデルが提示されている(一一三—一六頁)。

だが何時いかなる状況に達したときに輸入原材料や半製品ないし機械は国内生産によって代らるべきであるか。それを国内生産開始点 domestic production threshold つまり国内生産が採算に合うようになる最小の経済的規模という。いくつかの最終段階産業が確立されると、それらに共通な資材を作る中間財ないし基礎産業の自己生産が引合うようになる。そして基礎産業が一つ建設されるとそれが前向き連環効果を誘引し、ここに後向きと前向き連環のシーソー的前進と加速度が生ずるのである。

経済発展に演ずる輸入の役割に大きな評価が與えられていることが注目される(一一〇—一五頁、一七三—一四頁)。輸入は本来自分がやるべき宣傳をやってくれ、市場を擴大してくれ、確實にこれだけの需要があり、企業を経済的に開始しうることを教えてくれる。輸入の増加が国内生産を誘發するのだ。しかもより多く輸入が増加する商品において自己生産が早く始められ、その比較優位が高められる傾向がある(一一二頁)。このようにハートシュマンは輸入のもつ国内企業家にとっての需要形成と需要偵察の役割を強く指摘している。

もう一つ注目すべきはハートシュマンが二重経済的發展の必然性ないし正常性を承認していることである(一二五—一三二頁)。ここに二重経済的發展とは、近代産業的技術と前近代の

技術とが永く共存同棲していることである。後進國がその稀少な資本蓄積を有効に使う途は、新しい發展據點にそれを投入することである。それは資本集約的なものなるうが、資本集約的なものが優先するのではなく、それが新しい生産ホライズンを開拓するからである。時間はかかるうが、發展據點の確立によって、現存手工業や家内工業、さらに農業の必要をみたしそれらの生産能率を次第に高めていくことができる(連環効果)とするのである。⁽¹⁾

かくてハートシュマンの理論構造が、日本經濟について尺取蟲的經濟發展を歸納し、そこにおける輸出入の役割、さらに二重構造の積極的意義を評價したわれわれの研究と、いかに類似しているかが、いまや明らかになつたであらう。

(1) このことは一生産行程についても、基本的生産行程は資本集約的にし、周邊的作業については労働集約的にせよという示唆とも符合する(一一〇—一二頁)。地域的には發展の據點となる中心とそれが遅れる地域とが生ずるが、これを tricking-down and polarization effects という言葉で説明している(一八七頁以下)。

(2) 小島清『日本貿易と經濟發展』第八章、第十章。Kiyoshi Kojima, "Japanese Foreign Trade and Economic Growth," *Annals of the Hitotsubashi Academy*, April 1958. Ditto, "Capital Accumulation and the Course of Industrialization, with Special Reference to the Economic Development of Japan," unpublished

Discussion paper, Jan. 1959. なお二重經濟發展について興味ある論文が發表された。E. Hagen, "An Economic Justification of Protectionism," *Quarterly Journal of Economics*, Nov. 1958.

四 讀 後 感

ハーシュマンの新著に對しては、同感を禁じえない點の餘りに多くして、いまだ積極的コメントをもちえない。中南米と日本と研究對象は違ふが、ハーシュマンが赤松博士やわたくしの研究と類同の理論構想に到達していることは意を強くするものがある。すでに赤松博士の供給・輸入乗數に對するコメントとしてあげられていることであるが、ハーシュマンが産業連關分析手法を基礎にしそれを縦横に驅使して、彼の積極的理論を裏づけかつ展開している點は、大いに参考とすべきであり、高く評價されねばならない。

ハーシュマンの不均衡的成長の理論に對しては贊同を惜しまない。生産力不足の後進國經濟の發展について供給側に力點がおかれることは當然であり優れた着眼である。だがそれは結局

「供給が市場を生む」というセイの販路法則を當然に假定しているであろうか。やはり需要面とのつき合ひの問題がもう少し積極的に究明されねばなるまい。内需不足が輸出・ドライブによって解決されねばならぬという如き問題の存在することを想起せねばならない。そしてここでも供給と需要との不均衡的・シーソー的成長が考えられるかもしれない。

不均衡的成長の理論が一國の經濟發展のプロセスとしては正しいとしても、その延長としての對外經濟關係、いかえれば多くの國の不均衡的成長は、いかなる國際分業の調和と不調和をもたらずであろうか。諸國經濟發展のシーソー・ゲームの理論が書き出されねばならない。後進國の工業化の成否が、一方、國內生産開始點に達した産業への先進國からの抑壓、他方、輸出段階にまで成長した産業への海外市場のしめ出しなど、國際經濟環境に強く左右されることはいうまでもない。國際分業の動態的調和的發展の理論を明示することなくしては、一國的不均衡成長の理論もなお安住の地を得難いのではあるまいか。いずれも今後の展開が期待される論點である。

(一橋大學助教)